

赤いおぼろ町 知標。

第二十四弾 松ちゃんの戦後闇市メモリー編

おなかをすかして、目を輝かして
だれもが米の飯を夢見た時代。
一日一日を悔いなく生きる
力にあふれた日々が甦る。
光に満ちた青空の下で。



松村常雄 (62歳)

1931年2月12日生まれ。同志社大学経済学部卒業。塩干物をあつかう松村屋の4代目。錦市場振興組合理事も務める。趣味は歌舞伎とミュージカル鑑賞。



新京極児童公園の前にある京極食堂は今も昔も人気のおかずと定食の店。少々濃いめの味付けが特徴だ。

錦のアーケードは黄色・赤・緑。どんな素材も美しく見えることと心理的影響から決められたとか。



今年8月のアーケード工事完成までにはこの光景が楽しめる。雨の日は大変そうだが、晴天の日の心地よさは満点。

歴史と伝統ある京の台所と称され、今や確たる地位を築いている錦市場。全長400mにも満たない商店街であるが、両側には140軒以上の店が軒を並べ、こぞって新鮮な品、旨い品を競いあって売っている。その売り上げはデパート1軒分にほぼ相当するといふから大したものである。しかし錦通りは最初からその名をいただいていたわけではない。知っている人は少ないであろうが、平安時代には浮浪児たちがたむろしてそれは汚い通りだったのだと、なんと糞の小路と呼ばれていたのだとか。それがあまりにもあまりなので、時の帝が南にある綾小路と対になるように錦小路と命名するように言われたのだとか。豊臣時代になって魚鳥の市場として発展、江戸時代になってさらに繁栄をきわめ、今日に至る、というエピソードには事欠かない京の名所なのである。

ところで今、錦市場は一部が青空市



場になっている。昨年より引き続き行われている、おなじみのアーケードを新築する工事のためである。8月には前面完成予定だが「青空になったんは終戦の直後間なしぐらいのもの。その後は白テントになり、アーケードになりはしたけどねえ」と懐かしそうな顔で空を見上げるのは、錦で代々乾物屋を営む松村さん。錦で商いをする人の多くがそうであるように、松ちゃんも店の奥にある住まいで生まれ大きくなった。このことは次代を担う子どもたちに少なからぬ影響を与えてきた。商売、それも京都独特の得体の知れない代物を肌で感じる、という貴重な体験を積ませることにつながったのである。平均的な一日の予定から、仕入先との関係、品物の善し悪し：ありとあらゆる大切な情報を小耳にはさんだり、あるいはそれとは知らずに彼等は身につけてきたのである。

松ちゃんの店では国産の品しか扱わ



豊臣時代から魚の取引が盛んだっただけに今も魚屋さんが多い。

裸電球に照らされる野菜や果物はツヤツヤとして、どれも美味しそうだ。



松村屋は4代目の乾物屋。いい物だけを扱う店として評判が高い。

新築なったアーケード部分の縦の通りが交わる天井には、フレスコ画を模した絵が。全部で5ヶ所ある。でも上ばかり見て人にぶつからないように。

mod's hair

Les coiffeurs des magazines

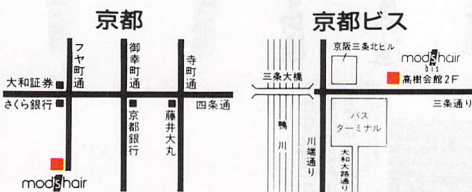


LA MODERNITE

(ラ・モデルニテ)

60年代半ばから70年代にかけてのアートシーンでモダニズムのなかから誕生したミニマルアート。それは、すべてのムダや虚飾をとり去った、クールでビュアなスタイルです。

'93年春夏 モッズ・ヘアのテーマ「ラ・モデルニテ」は、当時のミニマルな考え方やシンプリシティにインスピレーションを得たもの。ニューモダニズムとも呼べるようなシンプルなカットを提案します。ロングのSILENE、ポップのRIGA、ショートの新DEWANE。この3つのスタイルは、奇をてらわないベーシックなカット。ボリュームを出さないように、センターパートで髪をびったりとなでつけます。



371・2858

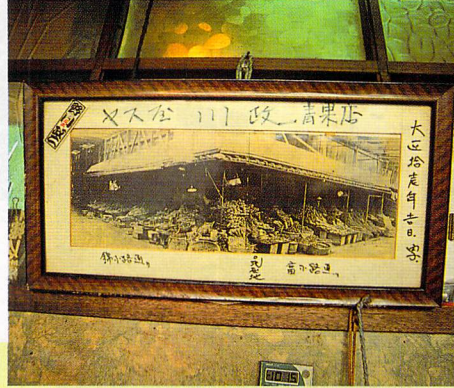
京都市下京区フヤ町通四条下ル八文字町341

752・0027

京都市東山区三条大橋東入北側高樹会館2F

未だ知らぬ
標の町

通りの中には昔の店構えを写真に残して飾ってあるところもちらほら。



市場の中には生まれも育ちも学校も同じの知り合いが少なくない。

ないと昔から決められてきた。「鰻の一夜干とか干した海老とか、今の時代やから国産と輸入物とはエライ値段の開きがある。輸入物は安いけど、一度信用落としたら取り返しのがかんことになりすからね」と。ところで錦には魚屋さんに八百屋さん、乾物屋さんといった同じような業種の店が何軒もあることを不思議に思う人はいないだろうか。どうしてそれでやっていけるのかと。もちろん観光客や一見の客もたくさんいるが、錦で商売をする人々が一番怖がっているのは料亭などの玄人筋と地元人間。特に地元客は玉子はこの店、シヤケの切身はあの店、焼魚はここ、白身魚はここで、ワサビはそこで、生野菜はここで：というふう一品物を買う店を細かく区別してほとんど決めている。「○○の店の△△は良いから、ここで買いなさい」と親から伝えられたからである。各客は商店と長いつきあいをしているのである。一度これと決めたらとことんつきあう。だからこそ、店の方も信用を落とすこと、

長年のつきあいを裏切ることなどできないのである。子どもたちはよく使いにも行かされた。小学生時代、松ちゃんと同じ錦の中にある仕入れ先へ納金に行かされた。それをどうしたはずみか覚えがないのだが落としてしまったのだ。店からそう遠い距離ではない。何度も行きつ戻りつして探したが、どうしても見つからない。「どうして良いのかすっかり途方に暮れて」店に戻った松ちゃんを待っていたのは父からの強烈な叱責だった。「うちには蔵がなかったの、押入に閉じ込められて晩ご飯はヌキ。思いだしとうもないミスですわ」と。店とは別の場所に住まいを持ち、錦には住んでいない人も増えてきた。それでなくとも町中は子どもが数少ないのに、今では町内に住む小学生は数えるほど。「私が小学校6年生の頃は20人近くいましたね、朝決められた集合場所で旗を持って立ってるんです。全員が揃たら先頭になつて生祥小学校まで下級生を引率するのが役目。なんで私が

アーケード完成までの一切を取りしきる事務所には資料がいっぱい。



松ちゃんが仕入れ先へ納めるお金を落として探し回った辺り。今でも通る度に恨めしく思っているとか。

未知標の町

六角の現在サカエがある場所には交番があり、その正面には安来節ばかりを一日中流している店があったとか。



今はブティックだが、昔は白木屋というデパートのはしりのような店だった。



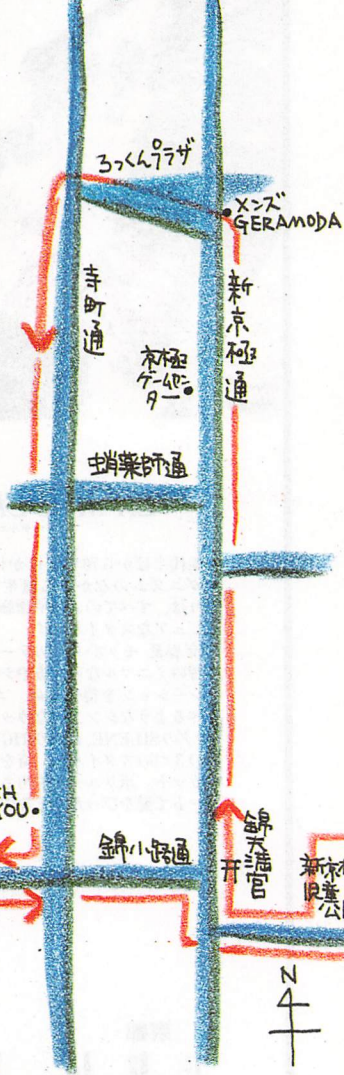
松ちゃんの小学生時代、ここはニュース館と呼ばれ、低料金でニュース映画と漫画を上映していた。

大将に選ばれたんかは記憶にないんですけど、子どもごろころにも結構誇らしもんでしたよ」
やがて戦争が末期をむかえ、終戦。いくら市場といえども食糧事情はひどいものだった。松村さんは同志社大学の学生。学生服を着ていれば、ヤミ米を仕入れてきても見のがしてくれることが多かった。父方の実家がある兵庫県の豊岡まで、満員列車に長時間ゆられてよく米をもらいに行った。
「むこうに行くくと銀シャリ、混ぜ物のない銀シャリを腹一杯食わしてもらえます。家にもって帰った米は菜っ葉だの雑穀だの混ぜ物をするから旨くない。あの時代ほど白米の飯が旨いと思っただことはいない。行き帰りのスジメ列車の疲れを忘れさせるほどの味であったのだろう。
京の台所たるもの、そうそう落ち込んでもいられない。復興の兆しは青天井の下。疎開して空家になった店先に子どもを連れた女性が坐り込んで蒸したまんじゅうやフライまんじゅうと称する揚げ菓子売ったり、怪しげなおツサンが酒を売ったり、という鬧市スタイルが始まった。「本当に今のこのアーケードのない状態にそっくりや」とか。いつの世もたくましく、京の人々を養い続ける頼もしい市場なのである。

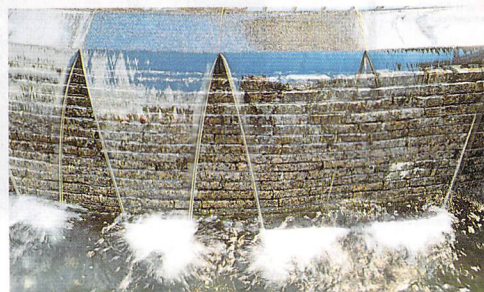
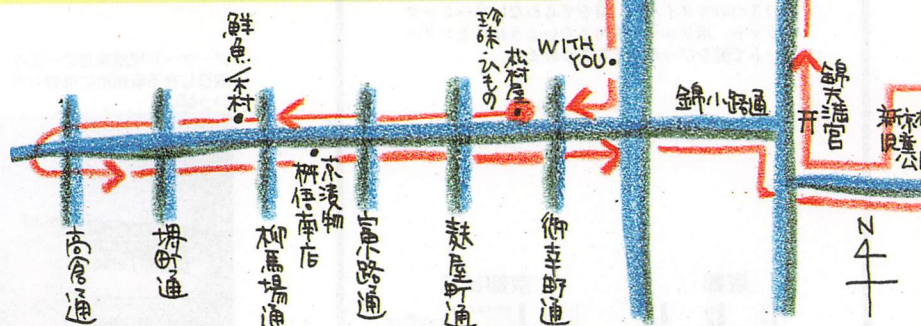
生活の場は錦にあったが、遊びの場はもっぱら新京極だった。幼児期にはうら若きお手伝いさんの背におぶられて新京極児童公園へ。そこにはウサン臭そうな串カツ屋、今で言うゲームセンターがあった。母には串カツ屋の肉はなんの肉かよくわからないから絶対に出入り禁止と言われていたのだが、お手伝いさんはよほど食べたかったのだろう。しばしば母の目を盗んで松ちゃんを道連れにした。「小指の先ほどの小さい肉にソースをつけて食べるんやけど、禁断の味がしたな」
10代後半はダンスに熱をあげる。ビッグバンドの入ったグランドキャバレーに通い、燕尾服に身を包んでステツプをみがいた。「今でもワルツにジルバ、クイックステツプ、なんでも踊れるよ」と自信たっぷりである。怪我で休演したダンサーのかわりにステージで踊ったこともある。「もちろん親父には内緒で」だ。錦で生まれ育っただけに、ワルサをするときにはあまりにも顔が刺す。だから新京極に足が向いてしまうのだろう。

「今日はサンマ安いよ」「トマト買うといてーな」威勢よく飛び交う呼び声。女人と素人が同じ店に入ります珍しい形態は、良いものを扱っているからこそなのである。

今日の未知標の町



錦寺町の角にあるブティックの上階は昔ながらのマンション。壁に施されたレリーフもアーケードが完成すればまた屋根の存在になり、人目にはふれなくなるだろう。



小さな公園的存在として整備されたつくし広場には豊かな水の流れが、休憩にもってこいのポイントだ。

取材文／小林明子
写真／大田メグミ